

都市に浮かぶ幼稚園 (1)

少子化の波の中で

嶺村 法子

○幼稚園をとりまく状況の変化

幼稚園の教員になって、今年で四年目になります。とはいえ、そのうちの約一年間を産休・育休をとって休んでいたのので、実際には、やっと三年めというところですよ。

短い経験年数から語れることは限られています。が、それでも、この四年の間に、幼稚園をとりまく状況が、年を追うごとに厳しいものになってきているということを、ひしひしと感じます。

とりわけ、幼児・児童数の減少によって、引き起

こされた学校(園)の適正配置の問題は、今や全般的な問題として、地域社会に大きな波紋を投げかけています。

私の勤める園でも、園児数の減少に伴う学級減は、深刻な問題になっています。私が赴任した当時は、年長(五歳児)・年少(四歳児)各二学級ずつ、約八〇名の園児が在籍していました。それが、翌々年には年少が一学級減り、今年度は、年長一学級(一九名)、年少一学級(二〇名)の二学級(計三九名)にまで半減してしまいました。

それでもまだ園児数に恵まれている方で、区内には、年長・年少合わせて一〇名以下で担任も一名という複式学級の園が、一七園中三園もあり、さらに一園は、園児数がゼロとなり、今年度、休園になっています。

ここでは、学級減になったことで、子どもどうしの育ち合い云々よりも、何より教員の数が減ったこととそれ自体が大きな問題を生み出しているということについて、述べてみたいと思います。

第一に、教員の数が減れば、様々な価値観、保育観がぶつかり合う機会もそれだけ減る、ということが挙げられます。

何もわからない新任の頃、同学年を二人で組んでいたからこそ、先輩に疑問をぶつけることができました。その場で即、解決の道が見出されることばかりではありませんが、毎日の具体的な場面——教材の扱い方や行事への取り組み等々——で、実に多くのことを学ぶことができました。さらに、お互いの

やり方、学級の子どものたちの様子を見合い、話し合う中で、自分との違いに気づき、その違いを生み出している私自身の保育観について、今一度省る機会を与えられました。

こうした保育観のぶつかり合う話し合いの中から、個性として磨かれてくるもの、新たに生み出され共通理解されてくるもの……がその園の保育の幅を広げていくのだと思います。それは、とりもなおさず、子どもたちにとっても、様々な価値観、個性をもった大人との出会いによって触発される可能性が広がることを意味します。だからこそ、今日の前にいるこの子どもたち、この現状について具体的に語り合える仲間は一人数でも多い方がいい、そう思うのは欲張りに過ぎるでしょうか。

しかし、自分たちの園だけでは解決できないこの問題も、ちょっと視野を広げればまだまだ工夫の余地があることに気づかされます。近隣の幼稚園、どうしの交流、併設の小学校との交流、地域の人たちと

の交流等、積極的に園外に目を向けていくことが、今後の幼稚園の大きな課題になると思います。

第二に、自分や家族の体調が悪い時、頼りにできる同学年の担任がいなことが、無理をすることに つながりかねない、ということが挙げられます。もちろんそうならないよう普段から声をかけ合っていますが、三人の内二人が休んだら……という危惧は拭い去れません。

私の妊娠中は、遠足、プール指導等、主任は言うまでもなく、他の三人に私の抜けた穴を補って余りある程助けられ、元気に乗りきることができました。学年の中でも、主に部屋の中の遊び、外の遊びというふうに分担して見合う等、随分と配慮してもらいました。

そういうことが、文字通り手の数の不足からできにくくなっているのが現状です。妊娠軽減措置として、幼稚園にも小学校の体育講師と同じような扱いの教員が配置されるよう、又、病気療養等が長期に

渡る場合にも、主任ではなく臨時的任用教員が学級担任として配置されるよう、切望する所以です。

第三に、教員の数が減ると、当然一人が受け持つ園務分掌が増える、ということが挙げられます。

行事の立案等、直接保育に関係する仕事にも言えることですが、それ以上に、事務の仕事が増えることは、一人一人の教員にとって大きな負担になっていきます。ややグチっぽい話になるのですが、いつの日か、幼稚園の教員が事務の仕事から解放され、子どもたちのために使える時間が十分に確保できることを夢見て、声を大にして言いたいと思います。

学級担任にとっては、慣れない事務の仕事が、保育後の貴重な時間を刻々と削り取っていくという現実があります。主任ともなれば、さらに事務の仕事の占める比重は大きくなり、学級担任から主任になることは、幼稚園の現場から会社に転職する位のギャップがあるのではないか、と思われる程です。

しかも、細かな約束ごとに則り、複雑な手続きを

経て書類を作成しなければならぬとか、このOA機器の発達した時代において尚、カーボン紙を敷いて力を込めて筆記しなくてはならないとか……が、少人数で能率よくこなさなくてはならない仕事を、ますます時間のかかるものに行っているようにおもいます。子どもたちが帰った後の二時間が、丸々書類書きで終わってしまった日などは、なんとも虚しいものがあります。

併設の小学校には、事務職員が常勤していて、事務の仕事のほとんどを引き受けています。幼稚園にも、週に一度でも二度でもいいから、定期的に事務職員を派遣してくれるような制度ができるよう望んでやみません。そして、早く区とオンライン化されて、園の端末から入力するだけですべてO・Kという時代になってほしいものです。

○少人数園の悩み　　↓Nさんの話より↓

最後に、全園児数が二十名に満たない幼稚園に勤

務する同期のNさんから聞いた話をもとに、園児数の減少がもたらしている教員の悩みを、別の側面から見てみたいと思います。

四年間、一〇名以下の学級を担当してきた彼女が、少人数の良さとして挙げたことは、子ども「先生！」という声に、そう言うてきた子どものその時の思いに、即座に応じることができるといことでした。特に、製作活動や運動的な活動の技能的な面での援助という点で、一人一人に十分に目をかけ、手を添えることができるということは、時にうらやましく感じる点でもあります。

逆に、問題点としては、何でも先生と自分との関係で済ませてしまいがちで、友達どうしのかかわり——物を取り合ったり、譲り合って使ったり、順番を待ったり——が少ないということを挙げていました。

子どもに、「何でも先生がやってくれる」「自分の思い通りになる」と思わせないために、Nさんは、

「先生は忙しい」「今、手がふさがっている」という状況に自らを置くことで、子ども自身が、自分たちで何とかしなくては、と思えるような状況を作る工夫をしている、と話していました。それでも尚、大勢の子どもたちと接してきた人から見れば、手をかけすぎているという声もあると聞きました。

しかし、一方で「先生が手をかけてくれるから」という理由で、わざわざ園児数の少ない幼稚園を選んで通わせる保護者の方もいらっしゃると思います。その場合、「手をかける」ということが、実際に手を出す回数という意味で使われているフシもあります。少人数の子どもたちの中で、いかにも先生がいるという居方をしない努力、手出し、口出しをしない努力をしている教師の思いと、少人数園を選んで通わせる保護者の思いとの間にギャップがあることも、少人数園の見逃せない問題点であるように思います。

大人の目の届かない所で展開される子どもの世界を存分に楽しむ、ということが、地域社会の中で非常にできにくくなっている今日、せめて幼稚園という囲いの中では、子どもたちだけの世界を楽しむ時間を保障したい、そう願うのは、私ばかりではないと思うのです。にもかかわらず、園児数の減少という現実が教師の目を逆に届きやすくしている、そしてそれを望む声があるところに、都心で保育することの難しさを感じます。

「でも」とNさんは言います。「子どもの数が多くても少なくても、こういう子どもに育って欲しい、という教師の願いは変わらないのよね。」と。

では、その願いを実現するために何をすべきか——そこに、子どもの数の問題を越えて、私たち保育する者に課せられた普遍的な課題があるように思います。

(中央区立明石幼稚園)